書 評

SDGs 時代の森林管理の理念と技術 ― 森林と人間の共生の道へ

山田容三 著

昭和堂, 2020年5月15日発行, 248頁, 2,800円(税別), ISBN978-4-8122-1921-8

山 田 祐 亮^{1,*}Yusuke Yamada^{1,*}

本書を手にとると、「哲学なき森林政策に終止符を」という帯の文言に、まず目を引かれる。森林・林業にかかわりのあるものならば、この言葉に多かれ少なかれ共感を覚え、本書への関心を抱くはずだ。そして実際に読了すれば、自身の内奥に哲学の芽生えを感じるだろう。

本書は2009年に刊行された「森林管理の理念と技術 ― 森林と人間の共生の道へ」の改訂版である。書名の通り、森林管理の礎となる理念と、それを実現するための技術が俯瞰的に論じられている。改訂版では、スマート林業や新たな木材利用方法といった最新技術の紹介や、SDGs等を基盤とした持続可能な森林管理の考え方への言及が追加された。一方で、調査と評価に関する項目は削除されている。前の版に対する書評は松村(2011)を参照されたい。

本書は「第Ⅰ部 森林管理の理念」と「第Ⅱ部 森林管理の技術」の2部構成となっている。第Ⅰ部では初

めに、これまでの我が国における森林政策の理念のなさを指摘する(第1章)。その上で、西洋を中心に起こった環境倫理(第2章)や日本の自然思想(第3章)を概観し、多元的な価値観に立脚する環境プラグマティズム(第4章)の考え方を取り入れた著者独自の森林管理の理念(第5章)を論じている。第Ⅱ部では理念を実現するための、ゾーニング(第6章)や造林技術(第7章)、素材流通を含めた生産システム(第8章)といった理論・技術論、そして森林・林業に関する最新技術と動向(第9章)が紹介される。また、担い手育成の重要性の指摘と事例紹介(第10章)がなされ、最後にSDGsや森林認証等に触れながら国際社会における我々の責務について述べている(第11章)。

この書評を読まれている方は、本書を読むまでもなく、森林管理に対して何かしらの理念を既に抱えておられると推察する。それと同時に、著者が指摘するように「その常識のような理念が、林業の現場ではなかなか実践されない(p.73)」ことへ歯がゆさを感じているのではないだろうか。これまで、理念と現実論は個別に議論され、その間には深い溝があったように思う。その結果、現場や実際の森林との関係性が希薄な環境意識が生まれ、本当の意味での持続可能性とは程遠い場当たりの森林政策につながっていたのではないかと。本書は理念と技術の双方を論じることで、その懸け橋とならんとする書籍である。それゆえ、具体的な技術論は各種参考文献に譲っているものの、実用性を損なっていない。難点を挙げるならば、「SDGs時代の」と冠していることから期待されるような、森林セクター外との包括的な連携による持続可能な社会の造成という観点までは踏み込んでおらず、やや物足り

* 連絡先 (Corresponding author) E-mail: yamayu@ffpri.affrc.go.jp

1 (国研)森林研究・整備機構森林総合研究所森林管理研究領域 (305-8687 茨城県つくば市松の里1)
Forestry and Forest Products Research Institute, 1 Matsunosato, Tsukuba, Ibaraki 305-8687, Japan

なさを感じることだ。これに関しては、現場・研究の双方の面で今後の発展が期待される。

森林管理に対する理念や選択すべき技術は地域や主体によって当然変わり得るため、本書から答えそのものを見つけることはできない。答えは自問を続け、参考文献等も当たりながら各自で見つけていくものである。本書はそのための基礎や材料を提供してくれる、森林・林業にかかわるすべての者の必携書だ。

引用文献

松村直人, 「森林管理の理念と技術 — 森林と人間の共生の道へ」 山田容三/ 「現代森林計画学入門 — 21世紀に向けた森林管理」 西川匡英, 森林計画学会誌, 2011, 45(1), 16–19.

(2020年7月13日受付)

(2020年7月19日受理)